

紹介

庄子大亮著

『アトランティス・ミステリー』

——プラトンは何を伝えたかったのか——

『アトランティス・ミステリー』という書名、そして新書という体裁から、好事家的な内容を想像されるかもしれない。確かにいわゆる専門書とは種類を異にするものの、その実、本書は学問に携わる人々すべてにとって重要な問題意識に貫かれた書物なのである。

著者、庄子大亮氏の研究テーマは、「古代ギリシア周辺世界における英雄伝説の受容」(『史林』八五巻二号、二〇〇二年、一—三二頁)などの論考に見られるとおり、古代ギリシア神話を社会に位置づけて、その意味・意義を考察することである。我が国では、その先鞭を藤縄謙三氏の著作に見出すことができる。その一方で、「古代史」あるいは「西洋史」の枠にとどまらない研究活動を行っており、文章の端々から

は学問と社会をいかにリンクさせるべきかということに強い関心を抱いていることがうかがえる。本書ではその両面が遺憾なく発揮されているといえよう。

本書が議論の組上に載せるのは、かのプラトンが語った「アトランティス物語」であり、それは『ディマイオス』『クリティアス』という二篇の対話篇、とくに後者において詳細に語られている。太古の昔、大西洋上に繁栄を極めたアトランティスという国があった。一時は地中海全体の征服を企図するも、こちらにもまた伝説上の国家である古アテナイによって撃退される。征服欲に満たされ、人々が次第に墮落していくさまは神々の知るところとなり、ついには神罰によって海中に没してしまったという。(第一章 アトランティス伝説とは何か)

プラトン自身が「真実の話」と強調するこのアトランティス物語は、古代において世間の耳目を集めたが、中世になるといったん興味は途絶える。それが再燃し、現在まで継続する関心の源となったのが、「新大陸の発見」であった。著者は、アトランティスがどこにあったのかを解明しようとするさまざまな考えを丹念に解説していく。

それと同時に、アトランティスへの関心は各時代・地域の事情が反映されたものであることも明らかにっていく。そして、大西洋實在説から、果ては超古代文明説まで検討したうえで、いずれもミステリーの答えとするには足りないとし、より根本的な問題へと筆を進める。(第二章 アトランティスは文明の起源か?) (第三章 アトランティスとミノア文明) (第四章 探索は続く)

根本的な問題は、「アトランティス伝説はなぜ語られる必要があったのか」という問いがこれまでたてられてこなかったことにある。著者は、この物語を語ったプラトンの意図が国家像の提示にあったことを見出す。すなわち、「望ましくない国家、アトランティス」と「理想的な国家、古アテナイ」という対の国家像である。最後にプラトンの神話観を整理し、プラトンが理想の国家像を説くためになぜ物語という形式を用いたのか解き明かす。ここでは、真実と虚構に対する私たち自身の姿勢も問い直されることになるだろう。(第五章 アトランティス伝説はなぜ語られたのか) (第六章 伝説の真実)

以上が、本書の概要である。議論の細部や推論に、疑問や異論の余地なしとはしない。しかし、古代（あるいは各自の専門とする時代）と現代の関わりを考える、そして学問と社会のリンクを考えるうえで、本書に学ぶべき点が多い。専門の如何に関わらず、学問に携わる多くの人々の手に取っていただきたい好著である。結論にいたるまで著者の文章は平易かつ明晰であり、読者はその語り口に一気に引き込まれることだろう。

(B40版 二〇二頁 P H P 研究所
二〇〇九年二月 税別七〇〇円)

(佐野光直)

A. Cain & N. Lenski (eds.),

The Power of Religion in

Late Antiquity

一九七〇年代以降、西洋古代史の領域では、二〇世紀後半の文化多元主義を思想的背景として伝統的なローマ帝国衰亡史観を拒絶する「古代末期」(Late Antiquity)

なる研究分野が台頭し、一九九五年には米国でこの領域を専門に扱う学会「古代末期の境界変動」(Shifting Frontiers in Late Antiquity)が発足した。各大会の成果は論文集として一九九六年から刊行が始まり、その七冊目となる本書には、二〇〇七年に米国・コロラド大学で開催された第七回大会の報告四四本のうち、内容の質および「宗教の力」というテーマへの関連性如何の観点から審査を経て選ばれた二八本の論考が収録される。執筆者は米国の一四名と

英国の六名をはじめ、イタリアから二名、ニュージーランド、アイルランド、豪州、カナダ、オランダ、ドイツから各一名と、英語圏の研究者が中心だが欧州諸国からも若干の参加があり、実際の大会には他にスペイン、ギリシア、またイスラエルからの参加もあったようである(大会ホームページ <http://www.colorado.edu/Classics/events/SFVIIHome.htm> および『古代史年報』六、二〇〇八年、五三六五頁所収の足立広明氏による本大会参加記を参照)。本書は、編者のひとりN. Lenskiによる趣旨説明と簡要な内容紹介を含む序論に続き、八部から構成される。限られた紙幅

ゆえ多岐に及ぶ論点の一端を詳しく紹介することは叶わないが、編者の言をよすがとして各部の内容を瞥見するならば、あらまし以下のごとくである。

第一部は「宗教と言葉の力」と題され、「古代末期」の著作家フルゲンティウスやアンブロシウスらによって、ウエルギリウスやセネカなどの古典文学が新しい文脈のなかでいかに繰り返され変容したか、宗教・力・テキストの交差する場が探られる(E. Albu; J. Lössl; G. Raspariti; D. Shanzer. 括弧内は執筆者、以下同)。第二部「神を御する」は、「古代末期」の哲学者ボルフュリオスとイアンブリコスを主たる対象として、新プラトン主義とその神秘秘術に関する論議を扱う(E. Digeer; S. Krüpe; A. Johnson)。第三部「皇帝と宗教的権力の展開」では、モダニストによる「教会と国家」の区別は「古代末期」には適用しえぬとされ、皇帝権力と不可分に結び付けられた当時の宗教的権威のありさまが、嬰兒遺棄やテオドシウス二世治下の宗教政策などを通じて考察される(J. Grubbs; H. Elton; C. Pazdernik; H. Leppin)。第四部「教会のヒエラルキーと宗教的権力の